

字をつけて、さて成長て元服をもまたらむ時に、實名と共にこそ、太郎次郎三郎などはつくる例なりけれ、

〔燕石襟志〕苗字

海嶋なる人の名は、今將聞わきがたきもあれど、亦おのづからいにしへに稱へり、伊豆の大嶋の居民に、東四郎太郎三郎人の名にて一或は百太郎二郎など呼びなすものありとぞ、是は一男を太郎、二男を二郎とのみ呼べば、每人にして紛るゝから、住處の地名などに、祖父又父の名を被て、東の四郎が一男を東四郎太郎、又それが三男なれば、東四郎太郎三郎と呼ぶと聞ゆ、

〔茅窓漫録〕郎字

此邦の人、太郎二郎など名づくる事、古今常例なり、其始は日本紀に、皇極帝四年、蘇我入鹿を、君太郎といふよりこと起りて、光孝帝の三子を太郎二郎三郎と稱し奉るも、唐朝の例に倣ひたまふにや、唐太宗は、高祖の二男にて二郎と稱し、玄宗は睿宗の三男にて三郎と稱するがごとし、後世多く其例に倣ひて、源頼義の三子は、太郎二郎三郎と稱し、佐々木兄弟五人、太郎定綱より五郎義清まで皆おなじ漢土も五郎六郎は、唐朝より俗をなす事、隋唐嘉話に見えたり、○中大抵唐朝より専らにいひし事と見ゆ、此邦も其頃は唐朝と數往來せしゆゑ、彼土の稱呼にならひ、遂に俗をなせりと覺ゆ、源氏物語に、大殿の太郎君といひ、次郎三郎、肥後國の大夫監にすかされてなど書きたるも、滋野貞主を滋二と稱し、在原業平を在五と稱するも、其例皆おなじ、

〔古事記〕

中

開化

此天皇

○中娶丸邇臣之祖

日子國意

都命之妹

意都比賣命

字意都三

生御子

日子

坐王

○中略

日子坐王、娶山代之在名津比賣、亦名菟幡戶辨、此一字生子大俣王、次小俣王、○中又娶其

母弟袁都比賣命、

○中略

〔古事記傳〕

二十二

意都都比賣命

○中略

此比賣の弟、袁都都比賣と云あり、是意と袁とを以て姉妹